

祭りが変われば未来が変わる

徳内ばやし

村山市・徳内ばやし振興会事務局

布川 淳一



山形の夏の祭りを代表するといえは「花笠まつり」。今その地位を脅かすと言われるまでに成長した「徳内ばやし」は毎年八月二十一、二十三の両日、村山市の「むらやま徳内まつり」で披露される。創設六年目の去年は県内外より十六万人が押し寄せ、普段は閑散とした楯岡商店街を熱気の渦が包み込んだ。

徳内ばやしは、郷土の生んだ偉大な探検家「最上徳内」翁に由来する。江戸時代、貧農に生まれ苦学した徳内翁は、北海道の厚岸町を起点に北方領土を探検、アイヌやロシアと交流し、多数の書物を残した。またその功績をたたえ厚岸には徳内神社がある。そんな縁で村山市が厚岸町と友好都市の盟約を結んだのは平成三年。同五年には姉妹商工会の契りを結んだ。その厚岸の港まつりで披露されていたのが「馬鹿囃子」で今の徳内ばやしの原型である。その囃子と獅子舞いが平成六年当時の「村山まつり」に招待された時の市民の反応は、まさしく「祭りってこれだよ!」と言っほど衝撃的であった。

その感動を自分たちも共有したいという思いが今の徳内ばやしのエネルギー源になっている。創設の苦労話はいくらスペースがあっても足りないのが割愛するが、参加団体数は一年目が三、二年目が六、三年目には九つであった。六年目の昨年は十七団体になった。結婚式のアトラクションなどの出演依頼が引きも切らず、十二年度は公式依頼だけで三十数回に及んだ。マスコミにも多数取り上げられ、他市町村からの視察も相次いでいる。

なぜこども人々を熱狂させるのか。そのキーワードを思いついた。それは

スピード感 (speed)
スマイル (smile)
セクシー (sexy)
スター性 (star)

この四つのSを挙げたい。まずスピード。踊り子の多くは十代から三十代の男女である。彼らが育ったのは演歌ではなくポップスの時代である。その現代の音楽に徳内ばやしのアップテンポのリズムが同調する。

次にスマイル。県内で笑いながら、思わず手拍子したくなったり飛び入りしたくなる祭りはあるだろうか。徳内ばやしは踊り子も観客も皆楽しそうにしており、ここが重要なポイントである。三番目はセクシーさ。夏の祭りだから暑い。だから男も女ももろ肌脱いで踊りまくる。だから見ている人をも楽しく興奮させる。最後はスター性。夜間照明に照らされきれいに化粧した踊り子は実に美しい。大勢の観客の前で踊ったり、演奏したりする経験を一度味わったら「やめられませ〜ん」という。普段の自分ではない別の人格に変身出来る、言わば「仮装現実」である。それだから庶民のエネルギーを昇華させる力をこの囃子は持っている。全国的に有名な高知の「よさこい」のアドバイザーの金子氏が徳内ばやしを見て、「我々が忘れてしまった祭り本来の姿を持っている」と語った。

たった六年でこれだけ拡大していった仕掛けを明かすと、市内には楯岡、大倉、袖崎、西郷、大久保、富本、戸沢、大高根という地

Value Sight 徳内ばやし



踊る人も見る人も楽しく興奮する徳内ばやし

域がある。これらの地域ごとにチームを作ってくれるように働きかけた。また全市横断的なクラブチームや職場チームなども参加する。これが、他の地区から負けたくないという意識の醸成につながっている。

徳内ばやしは、囃子だけが共通（それでも微妙に違うが）で、踊りの振り付けや衣装に關し制約は一切ない。各団体ごとに工夫が出来る。そこに参画意識が芽生えるから良いのである。地域に踊りや音楽や山車制作のプロが育つて来た。これまで地域行事に關心がな

かった若者やおかあちゃんも嬉々として踊りの振り付けを考えたり、笛の練習をしたりする。大太鼓を叩くオヤジたち、職業を生かした山車制作にいそむ大工さんたち。こういった人々に支えられて祭りは完成するのである。特筆すべきは、各地区の眠れるリーダーが目覚め地域を引っ張り始めたこと。いわゆる「アガスケ」の本領が発揮出来るのが徳内ばやしである。祭り本番ともなれば、各自工夫を凝らし「自分が一番」をアピールしている。そんなアガスケ集団のトップが集まるのが「徳内ばやし振興会」である。みんな常にプラス思考の連中だけに、村山市内で一番燃えている集団と言っても過言でない。例年二月に開催される囃子開きは全団体の幹部百五十人が集まり、飲めや踊れの大饗宴。是非一度ご覧いただきたいぐらいの燃え上がりである。（と言っても関係者以外不可）

徳内ばやしは当初より「民間主導、行政は黒子」というシステムでやってきた。もちろん祭りの運営は、とても我々だけでは出来ない。市や商工会の献身的な支援があつてこそ我々がスポットを浴びることが出来るのである。徳内ばやしの経済効果については大雑把な試算で恐縮だが、去年の場合まず経費が一団体当り百五十万円かかるとすると十七団体で合計約二千五百万円。一方、観客一人当り千円を使うとすると計一億六千万円。その他を併せると二億円近い経済効果となる。かなり少なく見積もっているのが実際はもっと多いと推測される。各団体とも地元からの寄付が主な財源だから、衣装などは地元の呉服屋さんなどに発注する。また祭り準備中に寄り集まれば、地元の酒屋、魚屋さんに酒や肴を

頼む。期間中のみならず反省会、芋煮会、新年会、総会などの会合がある。そこに新たな需要が生まれる。

無視できないのは、地域コミュニケーション効果である。小学生、青年層、高齢者と幅広い年齢層が練習する。すると、「あれはどこの子？」、「どここの嫁？」と話題になる。そこに新たなコミュニケーションが生まれる。都会ほどではないが、昨今地方も他人に對し不干涉の傾向がある。楯岡地区はアパートも増え核家族化している。そんな中で祭りを通じて地域ぐるみで子育てする事の重要性は文部科学省の答申を聞かなくても十分認識出来る。現に不登校の子供が学校には行かなくても囃子の練習には来たという事例もあつた。最後に、いつも私が訴えていることを書かせていただき筆を置く。

祭りが変われば、人が変わる。
人が変われば、街は変わる。
街が変われば、未来が変わる。

布川 淳一

御菓子司「松月堂布川」(村山市楯岡)5代目。
昭和27年、東京都品川区生れ。楯岡幼稚園、楯岡小学校、楯岡中学校、山形南高校を卒業。
東京高等製菓学校洋菓子本科卒業。
昭和49年帰郷、家業に従事。家族は父、母、妻、二男一女。
平成7年、十日町徳内ばやし実行委員長に就任、現在「元締」。平成8年、徳内ばやし振興会を設立し事務局長に就任、現在に至る。